№６５
令和７年３月３日
発行　多治見市教育研究所

URL: http://school.city.tajmi.lg.jp/kyoiku/
本誌は、多治見市教育研究所ホームページ上でもご覧いただけます。

巻頭言

「苦しかった時の話をしようか」

陶都中学校　校長　國府田　珠実

このタイトルは、森岡毅氏の著書です。本屋で思わず手に取り、当時一気に読みました。「君の強みは必ず好きなことの中にある」という言葉が心に刺さりました。最近では、２０２５年の開業に向けて、沖縄本島北部で建設中のテーマパークを立ち上げる、との記者会見にも出ておられました。

話は変わります。せっかくの機会をいただきましたので、私自身も自分の「苦しかった時の話」をしようか、と思います。

①　「先生、もうひとふんばり！」

中２・中３と持ち上がりで担任をした２０代後半、Ａ君との思い出です。

やりとりが難しく、突然「お前なんかあっちいけ！」「お前の授業は音楽じゃなくて、音が苦や！（思わず「うまい！」と返しました）」等、ことごとく怒りをぶつけられました。ほめても喜ばず、からまわり。でも他教科の先生の授業ではよい顔をしているのです。

一方、お母さんは大変協力的で、電話をすると「先生、ごめんね、家でも反抗期で。」と家での様子を聞かせてくださって、お母さんと分かり合えている、という実感が支えでした。

この年、私の学級経営で大切にしていた言葉が「もうひとふんばりの心」でした。子ども達は、彼と私がバトルした後、「先生、もうひとふんばり！」「ファイト！」と、私の掲げた言葉を、笑顔で返し、支えてくれていました。

１５年後、彼らが３０歳の時、突然連絡が来て、「先生、Ａ君も飲みたい、っていっとるで来てよ」と誘われ、再会しました。仲間にうながされ、Ａ君が「先生、昔迷惑かけてすみませんでした。今、子どもができて、親や先生の気持ちがよくわかる。」と言ってくれました。そして「初恋やったんやて。」とこれは気を遣って冗談を言ったのだと思いますが、照れ臭そうに言ったので、「うそやん！」と言うと「いや、私達みんな知っとって、トムとジェリーが始まった！って笑ってたよ。気付いていないの先生だけやったよ。」と皆大爆笑。１５年越しにわだかまりが解け、堅い握手をかわしました。時が解決することもある、と思いました。

当時、折れそうな心を支えてくれたのが生徒の言葉「もうひとふんばり！」でした。その後私は特別支援教育の勉強を始めました。学ぶほどに「あの時、私に知識があったら…」とＡ君に申し訳ない気持ちになりました。

②　「あんた、おもろいな～」

３０代前半、他地区の中学校に勤めた時、今まで経験したことのない仕事に追われ、生徒指導でも日々、苦しんでいた時期があります。今では考えられないくらい帰宅時間は遅く、眠れない日々が続きました。

ある日、朝の会中、各クラスから数人生徒が出ていって、階段に座っていました。すると校長先生がいらっしゃって、にやにやしながら一緒に階段に座り込み、彼らと話していました。私達担任はあせり、「すみません！」という気持ちで近寄ると、「校長先生はワルの気持ちをわかってくれる～！」と彼らが喜んでいました。

私はこの時の校長先生の姿に憧れ、たくさん、聞きに行きました。不器用でなかなかうまく立ち回ることができない私にいつも「あんた、おもろいな～」と声をかけてくださいました。自分の弱みも含め、個性を尊重してくださっているようで、この一言は今でも私の支えです。校長先生に「おもろい」と言ってもらいたい一心で、その後も踏ん張ることができました。

森岡毅氏の言葉「君の強みは必ず好きなことの中にある」から振り返れば、私は人と話すことが好きです。それが自分の強みなのかもしれないです。だから苦しい時、すぐにＳＯＳを出し、たくさんの人に助けてもらっています。感謝する日々です。

今、私は「話す」ことは、苦しみを手「放す」ことだと気付きました。